

門真から映画文化を世界に発信

全世界44カ国が参加した「門真国際映画祭2020」が先月、開催された。特定非営利法人 門真フィルムコミッション主催で、ボランティアなど市民団体が自発的に活動するこの国際的な映像の祭典は、世界にも類を見ない取り組みとして、年々充実している。運営資金は上限5万円の協賛金と寄附金のみ。不足分は、発起人の同法人那須理事長が自費を投入し、映像文化全体の振興を目指した「利他の精神」で貫かれている。

しかし、今年は課題が山積。提携映画祭の



撮影：山口紘司

門真市長賞のプレゼンターとして登壇する宮本一孝門真市長

NY Japan CineFestの開催延期や世界中の映画祭がコロナ禍で中止に追い込まれるなど、開催が危ぶまれたが、インターネット上の「スクリーンWeb」会場を創設する新たな展開となった。そして、実会場のルミエールホールでは、新型コロナウイルス感染症対策を徹底し、空間環境の除菌、観客への注意喚起、

感染確認国に関する情報の周知などと念入りの対応をした。そうして15日の授賞式は、レッドカーペットが敷かれた華やかな演出で会場には高揚感がみなぎった。なかでも「人が人を支えている」お弁当ケータリング部門の優秀賞は、この映画祭ならではの発想。奈須理事長は、「開催後も門真国際映画祭WEB会場には、閲覧者が絶えません。映画館復興の先駆けとなるようこれからも努めていきます」と挨拶。スタッフ全員が一丸となった映画祭は無事、幕を閉じた。